慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「説明」から「理解」へ : 歴史的理解の問題へ向けて
Sub Title	From "Explanation" to "Understanding"
Author	増沢, 照司(Masuzawa, Shoji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.4 (1975. 6) ,p.57(409)- 77(429)
JaLC DOI	
Abstract	歴史的説明のいわゆるポッパー・ヘンペル理論に対する最近の重要な批判は、ドレイ、ドナガン、ミンクらによって与えられている。私は一でこれらの批判を補強し、二でこの説明問題に、ポッパー・ヘンペル理論とは異なった視点をスケッチ風に導入してみたい。 In Part One of this paper I shall comment on the Popper-Hempel theory of historical explanation. I will point out the case which conforms to the deductive-nomological model of explanation, but nevertheless cannot properly be called explanation. However, the emphasis of my criticism will be placed on the inadequacy of the inductive-probabilistic model of explanation which has been formulated by C.G. Hempel. This model should be considered a device for prediction rather than a model of explanation. In Part Two I shall try to construct what might be called a Collingwoodian position of historical understanding. In order to characterize the semantic nature of historical description, I will introduce the categorical distinction between action and event, in terms of which some of the confusions underlying the positivist's or 'science-oriented' conception of history can be revealed and cleared up. Predicates of sentences can be classified in two ways with regard to their relationship to subjects: some sort of predicates such as 'promise' cannot be attributed to their subjects, while others can be, even if the subjects have no understanding of the predicates. I suppose that the meanings of such predicates are intrinsically combined with the internal ideas of the people to which these predicates are attributed, and that, therefore, they cannot be reduced to any sort of physicalistic terms. My research results suggest a relevant reason why history is, and should be, narrated in everyday language rather than in 'quantified' terms. I will also advocate a humanistic method of historical inquiry, pointing out that we cannot evaluate, even identify, the actions of our historical figures, unless we take the same criteria of judgement as those which they embraced. Through these arguments I hope to reinterpret such terms as 're-enactment' or 'understanding' (Verstehen) which were familiar to the Neo-Kantians and Idealists.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19750600-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「説明」から「理解」へ

――歴史的理解の問題へ向けて――

増沢照司

歴史的説明のいわゆるポッパー・ヘンペル理論に対する最近の重要な批判は、ドレイ、ドナガン、ミンクら[1]によって与えられている。私は一でこれらの批判を補強し、二でこの説明問題に、ポッパー・ヘンペル理論とは異なった視点をスケッチ風に導入してみたい。

一

「説明とは何か」その解釈がどのようなものであれ、それが「答」であるという点では、大方の論者の同意を得られそうである。説明とは、かくして、何かある一定の疑問――現に示されたものにせよ、インプリシットなものにせよ――に対して、とりわけ「なぜ」という疑問に対して与えられる答である。したがって、何かの説明が与えられたとき、それがどのような種類の疑問に対して与えられた答であるのかを吟味することは、説明問題の重要な鍵となるだろう。すなわち与えられた説明の適否は、それが答となるところの疑問との関連で判断されなければならない。ポッパー・ヘンペル理論はこの立場と一致するだろうか。

ポッパー・ヘンペル理論は演繹法則的モデル（以下演繹モデルと略）と帰納確率的モデル（帰納モデル）とから成る。演繹モデルにしたがえば、ある事象の説明とは、演繹の前提として、いくつかの普遍法則と、初期条件と呼ばれる一定の特称的な個別言明とを用いて、説明されるべき事象の言明を演繹することである。それゆえ、もし「なぜ“Qa”であるのか」と問われるならば、それに対する説明は〔I〕図のような演繹を示すことにほかならない。しかし、次のような例を考えてみよう。私が夕方の授業を終えて、帰宅するために田町駅から山手線に乗るときは、かならず電車が混雑している（$(x)(Px \rightarrow Qx)$）。このことから、今日の授業は夕方に終わるので（Pa）、帰りの電車が混雑するであろう（Qa）ことを演繹することはできる。この推論はモデルに適合しているが、それにも拘らず、この普遍言明も初期条件も「なぜ電車が混雑するのか」という疑問――「なぜ“Qa”であるのか」――に答えてはいない。「しかし、少くともこのモデルに適合しない限りは、いかなる説明も満足すべき答にはなり得ない」と主張されるかも知れない。たしかに、この意味で、ある種の説明にとって、そのモデルが必要条件と見なされる余地はあるだろう。だが、演繹モデルにパスすることは、それだけで、説明が正当化されることにはならない。この点に関しては、むしろ逆の考え方が支配的であったようだ。つまり、このモデルにパスすることが説明の十分条件であるということには、ポッパー・ヘンペル理論の批判家たちでさえ、疑いをもたない場合が往々にしてあったように思われる。

〔I〕

1. $(x)(Px \rightarrow Qx)$
2. Pa

---

3. Qa

以上のことは、もちろん、帰納モデルについてもあてはまるが、こちらのモデルに関してはさらに致命的な困難が横たわっている。歴史学や社会科学で扱われる法則（もしそう呼べるならば）は、実際、ほとんどのものが高々確率統計的であることを考えるならば、我われにとってはこのモデルの検討の方がより切実であるかも知れない。例として、ヘンペル自身が引用している「職業をもっている人々はそれを失いたがらない」という確率的法則について考えてみよう。〔II〕図

に即して解釈するならば、法則は「職業をもっている人はrの確率でその職業を失いたがらない」（Ps(B, A)＝r）という言明で表現されよう。いま、Mは職業を持っている（Ai）と仮定しよう。Mがその職業を失いたがらないという事実（Bi）の説明は、帰納モデルによると次のようになる。「職業をもっている人はrの確率でその職業を失いたがらない」という統計的法則言明と、「Mは職業をもっている」という個別言明とに基いて、「Mは職業を失いたがらない」という言明はrの確率で支持（説明）されている。この種の説明が、いかなる意味で説明なのか、実際、非常に疑わしいところである。「なぜMは自分の職業を放棄したがらないのか」という質問に対して「Mは職業をもっているからだ」とか「職業をもっている者はrの確率でそれを放棄したがらないからだ」といった返事は、答として不適切なのである。不適切である理由は、このような質問がなされる適当な文脈（「なぜ職業を棄てないのか」という質問は、異常な文脈でしかなされないのだが）を想像してみれば、自ずから明らかになるだろう。「Mは職業を放棄しようと思えばできたのに、なぜ実際はそうしなかったのか」とか、あるいはむしろ「なぜN（Mでなく）の場合は自分の職業を放棄したのか」という質問について考えた方が、問題点は一層はっきりするだろう。

〔Ⅱ〕

1. Ai
2. Ps(B, A)＝r

} は

3. Bi

} を確率値rで支持（説明）している。

「職業をもっている人はrの確率でその職業を失いたがらない」という統計法則は、人が職業をもっていながらそれを棄てようとする場合の可能性を退けてはいない。ところが「Mは職業を棄てようと思えば棄てられたのに、なぜ実際は棄てなかったのか」という質問は、そのような可能性が実際に退けられたことの説明を要求しているのである。たとえば「Ps(R, Q)＝0.8」という統計法則は、QのときRである確率が0.8、そうでない確率が0.2であることを示している。ある場合（i）に、Qであったとき、続いてRが起こったとしよう。帰納モデルによれば、この場合の説明は〔Ⅲ〕図のようになる。しかし他の場合（j）に、QでありながらRが続いて起こらなかったとすれば（Nが職業を棄てた場合のように）やは

り同じ法則を用いて〔Ⅳ〕図のような説明も成りたつことになる。もちろん、ここで法則「Ps(non-R, Q)＝0.2」は法則「Ps(R, Q)＝0.8」の単なる別の表現にすぎない。したがって〔Ⅲ〕図と〔Ⅳ〕図の意味することは、同一の初期条件と同一の法則によって、相容れない二つの事象「Ri」と「non-Rj」とをともに説明することができる、ということにほかならない。これでは説明にならない。0.8とか0.2とかの確率値の差をとりあげて「説明力」の強弱を問題にすることは、この困難を和らげることにならないように私には思える。というのは、いずれにしても、この種の説明は「なぜ non-R でなく、R であったのか」という疑問に対する答になっていないからである。

〔Ⅲ〕

1. Qi
2. Ps(R, Q)＝0.8

} は

3. Ri

} を0.8の確率値で説明している。

〔Ⅳ〕

1. Qj
2. Ps(non・R, Q)＝0.2

} は

3. non・Rj

} を0.2の確率値で説明している。

ポッパー・ヘンペル理論の擁護者たちが、説明問題においてこの帰納モデルの有効性を信じているという事実は、説明と予測との間にある論理的シンメトリーについての彼らの確信と無関係ではないように思われる。というのは、もし帰納モデルが予測の場合に一定の有効性をもっているとすれば、このシンメトリーを認める限り、説明の場合にもモデルの有効性が持ちきたされるだろうと考えるのは、たしかに、わからないわけではないからである。事実、この帰納モデルは、予測に適用する場合には、説明の場合と異なって、決定的に重要な役割を果たしている。例えば、「この注射をうてばインフルエンザは0.9の確率で予防される」といった統計的法則が知られていると仮定しよう。Mがこの注射を受ければ、モデルにしたがって、「Mはインフルエンザに罹らないだろう」という予測は0.9の確率で支持される。統計的法則は、注射をうてば十人のうち九人はインフルエンザから免かれる、ということを主張しているのであって、Mという個別的な場合についてどうであるかを述べているのではない。これはその通りである。しかし、だからといって、Mに関してこのような推論を行うことは、説明の場合のように無意味なもので

は決してない。なぜならば、Mはインフルエンザの危険性を減じるために、この予測に基いて、注射を受けようと決心することができるからである。我われの生活の中のきわめて多くの行動が、こうした帰納モデルによる予測を基にして決定されている。[2] この意味で、帰納モデルは予測のためのモデルであると、正当に言えるだろう。しかしながら、それをそのままシンメトリカルに説明のモデルと見なすのは、今までに述べた理由から、難しいように思われる。なるほど、演繹モデルに関する限りは、予測と説明のシンメトリーを言う余地はあるかも知れない。だが、それはいつでも成りたつわけではないし（先に挙げた混雑する電車の例は、予測としては有効でありながら説明にはならない場合である）また、成りたつとしても、純粋に論理の世界での話にすぎない。論理は、純粋であればあるほど、具体的なものに無関心なのである。予測と説明とをそれぞれ演繹的推論、遡及的（Retroductive）推論として規定し、それらが単に関心の方向という心理的な相違だけではなく、概念的な相違をも含んでいるということは、N・R・ハンソンによって適切に指摘されている。[3]

問題が歴史的説明となると、帰納モデルの困難さは一層深まることになる。第一に、歴史家――私が念頭に置いている歴史叙述の著者たち――は、過去の人間がこれこれの状況におかれたとき、たいてい（高い確率で）しかじかの行動をとる傾向にあった、というような確率的探究をしているというより、むしろ、人間が何をいかにしてどこまでできたのか、という可能性探究をしている。この可能性探究の論理的モデルは、未だ十分に研究されてはいない様相論理学のある種のものによって組み立てられるはずのものであろう。第二に、上のことにも関連しているが、歴史家は、確率値の低い事象にこそ関心を寄せていると言えよう。「一回性」とか「個性記述的」という概念について、かつて歴史家たちの間で誤解があったとしても、それらはなお彼らの関心の向き方を示唆している。確率的に稀な事象をとりあげて云々することは非現実的である、とヘンペルは抗議している。[4] しかし、この場合にヘンペルの考えている「確率的に稀な事象」というのは量子力学などで問題にされるようなきわめて小さな確率値で起こる事象にほかならない。ところが、社会科学や歴史学で

問題にされる統計的法則は、実際「例外」と呼ぶことが不適切なほど多くの例外をもっているのである。いや、むしろ、正に例外的と言えるほど、確率の低い事件が、それまでとは根本的に異なった新しい世界を導いてきたという事実に、歴史家たちは、歴史家としての職業的情熱をかきたてられるのだと言えるのかもしれない。

第三に指摘しておきたいことは、帰納モデルが本来量子力学的世界像（ニュートン的世界像に対するところの）に由来しているという事実である。この事実が重要であるのは、前出の「確率値rで説明される」という表現の奇妙さがこのことと関係しているからである。量子力学的世界像では、どのような事象や状態もすべて、関係した統計法則に応じて、ある一定の確率的分布としてのみ表現されている。この故に「シュレディンガーの猫」と呼ばれているパラドックスが生じてくるのだが、それは要するに、猫の生死に関して理論の語るところは確率分布でしかないにも拘らず、実際に我われが観察するものは、生か死かの、かならず、いずれかである（つまり確率分布ではない）という逆説である。これは統計的法則を個別的事象の説明にもち込む限り、必ずつきまとってくる逆説であって、歴史的説明の場合でも例外ではない。この逆説を解決するために量子力学では、確率分布として表現されている状態は、観測がなされるや否や、突然、我われが現に観測したような非確率的状態に収斂するのだといった、きわめて特異な解釈（波束の収縮）が導入されている。こうした解釈は、我われの通常の世界観にはおよそ適合し難いものであって、歴史的説明にもそのまま導入しうるものかどうかは大いに議論の余地があるのである。

帰納モデルの批判の最後として次のことを指摘しておこう。ポッパー・ヘンペル理論は、本来、与えられた説明が真に科学的なものであるのか、それとも科学を装った疑似的説明にすぎないのか、をテストするための論理的手続き（正当化の論理）として提出された。実際、説明であると主張するすべての説明を受け容れてしまうような認識論は、実証主義が歴史主義をそう批判したように、認識論として無効になってしまうだろう。ところで、帰納モデルはこのような論理的手

続きとして実質的に無効であると私は思う。その理由は、例えば「風が吹けば桶屋が儲かる」といった類の一般言明でさえ、帰納モデルに適合しているか、さもなければ、適合するように書き替えられるからである。ヘンペルの議論はこうである。実際に歴史家の使用している法則は、物理学者の法則に比べれば、はるかにゆるやかなものである。しかし、その違いは程度の差であって、基本的な論理構造の違いではない。したがって歴史的説明も、もしそれがまともならば、科学的説明の一種である。だが、ヘンペルはこの程度の差というものをどこまで許すのであろうか。真に科学的な法則になるためには、どれだけの確率値が要求されるのだろうか。しかし、どのような値を限界点と定めても全く無意味である。というのは、仮に確率値0.8以上を科学的法則となるための条件とする。したがって、例えば「Ps(R, Q)＝0.8」なる法則はこの条件にパスするだろう。他方、「Ps(non-R, Q)＝0.2」についてはどうだろうか。これは必要な確率値に達していないので疑似的法則ということにならないだろうか。これは奇妙なことである。なぜならば、これら二つの法則は同一の意味内容をもっているからである。法則の確率値の大小はその法則の科学性と全然関係ないのである。

二

歴史における説明の問題が、専ら、ポッパー・ヘンペル理論の擁護と批判という形で続けられてきたことに対して、反省の気運が歴史哲学者の間で起こってきた。その理由の一つは、この理論が正しいにせよ、誤りにせよ、いわば現場で活躍している歴史家にとってはそれほど啓発的でないということにある。その理論は、哲学者を別にするならば、せいぜい、一部の歴史家に、自分たちの今までの研究態度が正当化されたという安心感を与え、他の歴史家に、自分たちの抱えている方法論上の問題とは無関係なのだという確信を与えたにすぎない。少くとも歴史家の間ではそう受けとられた。哲学者たちの方はどうかと言えば、現在のところ、このポッパー・ヘンペル理論をめぐる論争は膠着状態を呈し、一つの行き詰

まりにきたという印象が彼らの間には支配的である。この説明問題が現在の知的状況の中で、もはや問題としての興味を失ったとは、私には思えない。恐らく問題のたて方それ自身にこのような行き詰まりの原因が求められるのではないだろうか。歴史哲学者は、今一度、歴史家たちの仕事ぶりを見直し、彼らがどのような方法論的問題に直面しているのかを見きわめる必要がありそうである。(5) 歴史の哲学的問題についてのアプローチが、職業的歴史家と職業的哲学者という二つのギルド的なグループによって別々になされ、両者の間にほとんど何の相互交流も存在しなかったという事実に、ミンクは哲学の側から反省している。哲学者と歴史家の関心が異なっているのはうなずけるとしても、両者の交流不在は学問の専門化・細分化がもたらした弊害にほかならない。しかし、専門化とは、本来、専門を越えた共通の知的問題を解決するための戦略であったということを思い出すべきだ、とミンクは言う。このような反省に立ってみるならば、歴史の分析哲学者たちは、新カント派やクローチェ、コリングウッドら観念論者の議論を克服することに、幾分性急ではなかっただろうか。というのは、これらの人々の結論を退けることによって、彼らの問題そのものまで退けてしまったふしがあるからである。実際、現代の科学哲学が自然科学者との密接な交流の所産であるとすれば、新カント派や観念論の哲学は歴史家との交流の所産であったと言えるだろう。（そして、おのおのがその不慣れな領域で不毛であったように思われる）。新カント派哲学にほとんど同意しない人々でも、彼らが、歴史に関しては、的をついた問題提起をしていることを認めざるをえないだろう。私は新カント哲学の復興を企てるつもりはない。ここではただ、実際の歴史家が直面する問題の性質を検討することから哲学を始めようとする態度にならおうというにすぎない。

歴史学の主題は人間の行為である。私はこのほとんど自明な（それ故、あまり考慮されていない）命題について考えることから始めようと思う。この論文の冒頭で、説明とは答であり、その答がどのような種類の疑問に対する答であるのかを吟味することは説明問題の鍵であると述べた。歴史学の疑問は、正に人間の行為についての疑問である。つまり、歴史

家が答えようとするところの疑問は、過去の人々が何をなしたのか――彼らはいかなる問題状況に直面していたのか、彼らはその問題状況をどのように把握していたのか、そして、それをどのようにして解決したのか、またはしそこなったのか等々である。[6] このような種類の疑問に答えることが歴史学の本質的究局的課題であり、これを目指していない歴史叙述は重要な意味において不完全である、と言えば独断的だろうか。しかし、実際、多くの歴史家は「歴史」という言葉を過去の単なる事象の叙述としてではなく、むしろ、過去の人間的な諸事実の叙述として理解している。あるいは、コリングウッドが「何についての歴史的知識が存在しうるかという疑問に対しては、歴史家の精神において再行為できるものについてである、というのがその答である。……それ故、自然の歴史というものは存在しないし、存在しえない」[7] と述べるとき、そこには同様の、そして最もラジカルな理解が基礎になっている。このような理解は、しばしば、人間の行為と自然事象の変化とを区別して考える立場と結びついているように思われる。この立場によると、要するに、自然はその環境的諸条件に対して、専ら甘んじる以外になす術をもたないのであるが、人間はそれらの諸条件に規定されるだけではなく、むしろ、逆に、それらに向かって能動的に働きかけをするものである。そして、〈事実としての〉歴史とは、正にこの働きかけの軌跡であり、〈叙述としての〉歴史はこの軌跡の表現に他ならない。こうした考え方は、それほど洗練されていないかも知れないが、大半の歴史家が承認するにちがいないものである。ところが、これと矛盾しかねない議論が、やはり歴史家によって（たいていは実証主義に鼓舞されてのことだが）表明されることもある。それは、大雑把には、次のように表現されるかも知れない。「歴史学も科学的知識を目指している。歴史学の対象は自然の斉一的な事象に比べればはるかに複雑な人間社会であるのだから、自然科学よりは厳密さを欠き、解釈上の対立を生みやすいのかもしれない。しかし、歴史学は科学として、より客観的な知識に到達することを目指している以上、自然科学者の態度と原理的に異なる態度をとることはできない。歴史的研究は、結局、人間的諸事実をその因果関係の相で理解することなのである」と。歴史が科

学であるという主張も、歴史家の研究態度は自然科学者のそれと原理的に異ならないという主張も、前に述べた自然史と人間史とを区別する立場と必ず矛盾するということにはならない。しかし、歴史は科学か、歴史家と科学者は同じ研究態度をもっているか、という問題は、科学の概念をどう解釈するか、どのような意味で同じ研究態度なのか、にかかっているだろう。そして、もし、歴史学が科学であるのは、過去の人間の諸事実を規則性や一般法則に包摂して説明する――つまり、ポッパー・ヘンペル理論によって説明する――という意味においてであると考えられているならば、これは人間史と自然史を区別する立場に矛盾するのみならず、重大な誤り（カテゴリー・ミステイク）を犯しているように思われる。(8)

以下ではそのことを明らかにしてみよう。

「過去の人々が何をしたのか」という問題は「過去の人々に何が起こったのか」という問題と同じだろうか。これは「私が腕を上げるという事実から私の腕が上がるという事実を引いたら何が残るだろうか」というヴィトゲンシュタインの有名な問題提起を思い出させる。だが、何が残るのか、それについての答をここで示そうとするのではない。ただ、人がすることと人に起こることとの区別を示し、それをとり違えることは歴史学的研究の性格についての誤解（ポッパー・ヘンペル理論がしたような）を導くということを明らかにしてみたいのである。簡単な例から入ろう。今、Mなる人物が選挙でA党に投票したと仮定しよう。〈Mがしたこと〉は「A党に投票する」という文で記述されている行為である。しかし、この文が指示している事態を記述する別の仕方は「Mが紙片に何ごとかを書きつけて、それを特定の函に投入する」というようなものであろう。この後者を〈Mに起こったこと〉と私は呼びたいのである。そのことをはっきりさせるために次のことを考えてみよう。「A党に投票する」という述語は、もし主語M自身が「投票」とか「選挙」とか、したがって「議会制」、「政党」等々について一定の理解をもっていないとすれば、Mに帰着させることが無意味になるような種類の述語である。ところが、他方、「紙片に何かを書きつけて、それを投函する」という述語は、こうした理解を前提にしな

くとも十分な意味をもってMに帰着させられるのである。ここで重要なことは、いずれの種類の述語も記述者（観察者）の概念であるが、前者の述語は同時にその主語の概念でもなければならないのに対して、後者の述語は記述者だけの概念である、という点である。機械が「故障する」、心臓が「鼓動を止める」等において、これらの述語は、明らかに、機械や心臓がもっている概念ではなく、我われ記述している者がもっている概念である。一方、彼は「三に五を乗ずる」、「賭をする」、「他人をだます」等々の述語は、もちろん、我われ記述者に帰属しているが、しかしそれのみならず、主語にとられている「彼」にもまた帰属している。ここで、主語「彼」が実際にこれらの言葉それ自体を知っているかどうかは問題ではない。問題は、これらの言葉が意味していること、あるいはフレーゲ流に言うならば、概念を彼自身が知っていなければならないということである。「三に五を乗ずる」ということの意味を知らないで、そのようなことをすることはできないし、「だます」ことが何であるのかを知らない人が、「だました」と言われたとすれば、それは、本当は彼がだましたのではなく、何か他のことが起こったのである。あるいはまた、これらの概念を主語が意識しているかどうかもほとんど問題にはならない。私は「3×5＝15」という計算をとっさにするが、「三に五を乗ずる」ということの意味を意識しながらそうするわけではない。しかし、どれほどとっさで、無意識的であっても、私が「三に五を乗ずる」ことの意味を知らなければ、それをすることはできないだろう。知っていることと意識していることとは別の事柄だからである。

「乗ずる」、「賭をする」、「だます」等の述語が専ら人間を主語にとっているのに対して、「故障する」、「鼓動を止める」等の述語が非人間的なものを主語にとっている、という事実はどうだろうか。これは私の議論にとって重要な点であろうか。もし表現上の形式だけについていうならば、これは何ら決定的ではない。はじめの例にもどると、「A党に投票する」という述語も「紙片に何ごとかを書きつけて、それを投函する」という述語も、ともにMという人間を主語としてもっている。後者の述語は、しかし、主語M自身による理解にかかわりなく、Mに帰着させられるというのは前に述べた。とこ

ろで、この述語が記述者だけの概念であって、Mの概念でないというのは本当だろうか。いやむしろ、「紙片に何かを書きつけて、それを投函する」という概念をMが理解していないと考えることの方が不自然かも知れない。この指摘は我われの議論がより慎重でなければならないことを示している。そこで、次のような説明をつけ加えておこう。記述者だけに帰属する概念とは、記述者がその対象となっているものに対して、任意の概念を設定し、それによって記述することができる、ということを意味している。したがって、「紙片に何かを書きつけて、それを投函する」という記述者の概念が、記述の対象となっている者Mの概念でもあったとしても、それは偶然的ないし便宜的なことにすぎない。つまり、もし必要ならば、記述者はM自身の知らないような新しい概念を設定することもできるのである。言い換えれば、どのような種類の記述系を選ぶかは、その対象の意図にかかわりなく、一方的に記述者に委ねられているのである。一般的に、記述者だけに帰属する概念は、むしろ、文の主語となっている対象の物理的な運動のみに言及していると言えるだろう。それ故、この種の記述はミクロには、生理学や物理学、素粒子論の段階にまで還元しうるし、マクロには、人口論のスコープにさえ含みうる性格をもっている。現実にはそのような還元をしないのは、知識の不完全なこともさることながら、実際的に無意味だからである。しかし、重要なことは、原理的にはそうした性格をもっているということであろう。ところが、このことは、主語にも帰属する概念による記述では、言えないのである。「MはA党に投票する」という文は、他方の記述の場合のように、ミクロにもマクロにも還元できないし、仮りにできたとしても、還元文の中に「投票する」という概念がすでに含意されているにちがいない。(9) このように考えられるとするならば、Mの投票の例において、二つのタイプの述語がともにMを主語としてもっているにもかかわらず、それは言語表現の上での一致であって、実際は、主語「M」の意味がそれぞれ異なっているのだということを指摘できるかも知れない。A党に投票するのは、M以下でも以上でもない、Mその人である。ここで主語「M」の意味しているものは、ある一定の生物学的有機体や物理学的物質ではなく、Mという

人格（パーソナリティー）にほかならない。他方、何かを書きつけて、それを投函するところの「M」は、Mという人格ではなく、むしろ、ある生物学的有機体なのである。実際的な言語表現は便宜性を尊重する。「しかじかの有機物」と呼ぶよりは「M」と呼んだ方がはるかに便宜的であるのは、ちょうど、化学者にとって「しかじかの液体化合物」と呼ぶよりは「インク」と呼ぶ方が便宜的であるのと同様であろう。化学者が、化学的研究の対象として「インク」というとき、そこには書きものをするための道具という意味は全然こめられていないのである。同じことは、二つのタイプの異なった述語をとる「M」についても言えるであろう。便宜性のゆえに、その言語表現は同一でありながら、その意味することが全く異なっているというケースは、とりわけ、人間的な事柄に非常に多いように思われる。たしかに、こうした事情が問題を一層複雑にしているのかも知れない。

記述者だけに帰属する概念と文の主語にも帰属する概念とを、それぞれ、事象のカテゴリー、行為のカテゴリーと呼ぶことにしたい。〈過去の人々に起こったこと〉は事象のカテゴリーで記述され、〈過去の人々がしたこと〉は行為のカテゴリーで記述される。行為を他の物理的変化や運動から区別しなければならないという主張は少なからぬ人々によって支持されてきたが、その違いがどのようなものであるのかについての適確な指摘はほんの少しの人々によってしかなされていなかった。その一人にコリングウッドがいる。彼は、私ならば行為と事象の違いについて述べるであろうようなことを、思考と感情の違いについて述べている。我われが思考するとき、それは「うまく考えたり」、「まずく考えたり」、「考え違い」であったりする。思考におけるこうした評価的な区別――これを示す一般的な言葉は「成功」と「失敗」であるが――は感情の場合にないものである。そして、「失敗とか、その逆の成功とかは次のことを意味している。失敗したり、成功するような行為は、ただ『何かをすること』だけではなく、『何かをしようと努力すること』（‘trying to do something’）でもある。ここで『努力する』という言葉は、『意欲』（‘Conation’）として〔心理学などで〕呼ばれているものを指してい

るのではなく、自分自身に一定の仕事を設定し、そうすることで自らに課す標準ないし規準に照らして、成功したか失敗したかを自分自身で判断するような行為をさしている。[10]」思考についてのコリングウッドのこの性格づけは、そのまま、私が行為のカテゴリーと呼ぶものについてもあてはまるであろう。もちろん、思考と感情の対比が行為と事象のカテゴリーの対比に一致しているかどうかは問題のあるところだが、ここではそれを明らかにする余裕もない。[11]

自分自身が何をしているのかについて何の理解もないときに、そのような行為に失敗や成功という概念を帰着させることはできない。例えば、まだたし算を知らない子供が、「5＋3＝□」と書かれた紙を見せられて、その□の中に5という文字を書き入れたとしよう。もちろん、この子供は計算間違いをしたのではない。たし算の規則や算術についての一定の理解が前提にされていないところで、計算間違いというようなことはあり得ないのである。□の中に5と書き入れたのは、何かほかの行為（例えば、最初に目に入った5という文字をまねようとしたとか）をした結果であるか、あるいは、偶然そういうことが起きたのかであって、計算するという行為がなされたのではない。計算間違いという概念は、計算という概念とともに、行為のカテゴリーに属しているのである。

行為は目的や意図や理由をもっているという点で物理事象とは異なる、と言われるとき、コリングウッドや私のしたような区別が感じとられていると言えるだろう。あるいはウェーバーが「意味のある行為」を語るとき、それは行為のカテゴリーで記述されるところの行為を基本的には意味している。しかし、行為と事象、意味のある行為と意味のない行為、という区別をつけるときに、しばしば混乱のもとになるある種の誤解に気を付ける必要がある。それは、行為と事象、意味のある行為と意味のない行為は必ずしも二つの異なる事態や出来事をさしているわけではない、という点である。私がいわば存在者のカテゴリーではなく、記述のカテゴリーを、議論の観点としてとったのは、この誤解を避けるためであった。「MはA党に投票する」という文と「Mは紙片に何かを書きつけて、それを函に入れる」という文とが指示している

事態は、時間空間的に異なる二つの事態ではなく、ある意味で同じ一つの事態にほかならない。Mは「紙片に何かを書きつけて、それを投函する」ことのほかに「A党に投票する」わけではない。したがって、行為と事象のカテゴリーの指示物は、しばしば、空間時間座標においては、同じ場所を占めることがある。二つの異なったカテゴリーに応じて、空間時間系の二つの異なった事態や出来事を仮定することは致命的な誤りであろう。ギルバート・ライルがカテゴリー・ミステイクと呼んで退けたデカルト的心身因果論は、この仮定に起因している誤解の代表的なものである。しかし、心的なものから物理的なものへの因果関係が誤りであるとすれば、当然、その逆、物理的なものから心的なものへの因果関係も誤りとなるだろう。マルクス主義者のいわゆる「土台還元論」はこの誤りの一例にすぎない。

他方、二つのカテゴリーの指示物が同一の空間時間的位置を占めることがあるということから、これらのカテゴリーが相互に交換可能であると信じられがちである。いや、それどころか、空間時間座標ということを言うならば、事象のカテゴリーは物理学というみごとな概念装置をもっており、これによって原理的には全ての空間時間座標上の位置を網羅できるはずだという理由で、行為のカテゴリーそのものが拒絶されるかも知れない。事実、初期の論理実証主義者が音頭をとった物理主義や、行動主義心理学などは、こうした態度を明らさまに表現した思想であったし、類似の態度はポッパー・ヘンペル理論の擁護者たちや実証主義的な歴史家たちの間にも見出される。彼らの誤りは、端的に言うならば、指示物の違いと意味の違いとの混同にある。カテゴリーの違いは記述の意味の違いである。「明けの明星」と「宵の明星」、「硬貨」と「しかじかの金属化合物」、「出血多量で死ぬこと」と「殺されること」、これらは指示物が同じでありながら、その意味の異なる記述の例である。行為と事象のカテゴリーの意味することの違いについては既に述べたが、一般に意味の同一性や語の交換可能性について、ここで詳しく述べることはできない。ここでは次のことを指摘するに止めておきたい。記号（記述）とその指示物との関係が人間を媒介にした間接的な関係であるということは、オグデン、リチャーズによって明

らかにされた。[12] この指摘がもたらす帰結の一つは、記号の違いは、その指示物に対して我われがこれからとろうとする行動や態度の違いを反映している、ということである。例えば「硬貨」という語によって、我われは「それで何が買えるだろうか」とか「インフレで値うちが下がった」などと考えるが、「しかじかの金属化合物」という語では「成分を調べてみよう」などと考える。歴史家が研究対象を行為のカテゴリーで記述するか、事象のカテゴリーで記述するかは、正に歴史家がその対象となる人々や社会に対してどのような態度で臨むのかにかかっているのである。

カテゴリーの区別について私の今までに述べてきた議論が正しいものであるとすれば、これは、歴史がたいていは日常言語によって叙述されているという事実に、積極的な意味づけを与えることができるかも知れない。歴史が日常言語で書かれることの理由としてあげられるものは、例えば、歴史学はまだ自然科学のような厳密な、量化された概念装置をもっていないからだとか、歴史学の対象は物理学のそれに比べればはるかに複雑であるために、厳密な、それ故、単純な概念を用いることができないからだ、とかであろう。こうした理由の背後にある共通した考え方は、もし自然科学に比せられるような厳密な概念を獲得すれば、歴史学はより科学的になるし、より進歩したことになる、というものである。言い換えるならば、歴史が日常言語で書かれるのは、望ましい状態ではなく、それにとってかわる、より科学的な言語が作られるまでの便宜的な妥協である、ということになる。日常言語の叙述に対するこれらの多くの否定的な意味づけの中で、ほとんど唯一の積極的な意味づけとなっていたものは、歴史が語り物であるということであった。しかし、これにつけ加えて、今や、こうも言えるのではないだろうか。歴史が日常言語で叙述されるのは、歴史の中の人々が、他ならぬ彼ら自身の概念、彼ら自身の日常言語によって行為していたからである、と。歴史学の主題は人間の行為である。〈過去の人々が何をなしたのか〉という疑問は行為のカテゴリーによってのみ答えられる。とすれば、行為のカテゴリーは、文の主語（行為者自身）によって理解されている概念から成るのであるから、結局、歴史はこの種の概念（日常言語）で記述せざるを

えないことになるだろう。言うまでもないことだが、歴史の叙述が行為のカテゴリーのみによって構成されているわけではない。むしろ、私の強調したいことは、歴史研究が、たとえどのような意味で、より科学的になるとしても、日常言語による叙述は、便宜的な妥協どころか、本質的に不可欠なものなのである、ということである。しかし「日常言語」という言葉は誤解を招きやすいかも知れない。我われ現代人と過去の人々とでは、生活形式が大いに異なっているのであるから、日常言語といっても、我われのものと過去の人々のものとでは同じではないだろうし、我われ同時代人の間でも、物理学者のものと詩人のものとは同じではないだろう。そこで、私が歴史叙述にとって日常言語が不可欠のものだと言うとき、この日常言語とは、正確には、それによって歴史的行為者が自らの行為を概念化するところの言語を意味している。歴史学の研究対象が、しばしば、日常言語によって行為する人々であることから、私は日常言語の不可欠性を述べたが、例えば、科学史などの場合、問題となるのは科学者や彼の理論であるのだから、不可欠なものは日常言語というよりむしろ、それらの科学者自身の概念ということになるだろう。仮りに、ニュートンが実験をしたり、計算したり、つまり彼の仕事を進めてゆくときに、微分学やその他の専門用語を用いていたとすれば、ニュートンについての歴史を書こうとする者は、ニュートンの仕事を、彼自身が用いた言語（微分学や物理学などの科学言語）によって叙述しなければならない。しかし、歴史家が科学的言語を用いるのは、記述を厳密にするためなのではなく、対象となっている行為が科学的言語によってのみ記述されるようなものだからなのである。

歴史の叙述が行為者自身の言語による記述を含まなければならないという指摘は、歴史的研究の性格を理解する上で、きわめて重要なものであるように思われる。そのことを、一つの極端な例を用いて、もう少し説明してみよう。今、実証主義的、行動主義的な歴史家Hが研究対象として隣国に宣戦布告をした国王の行動をとりあげたとしよう。歴史家Hは「ある人間が自分について何と考え、何と言うかということと、彼が実際に何であり、何をなすかということを、区別す

る」（マルクス）べきであり、「社会生活はそれに参加している人々の観念によってではなく、意識によって感知されない、より深い原因によって説明されるべきだ」（デュルケーム）と信じている。したがって、Hはその国王の行動を、彼の経済的条件や遺伝的な気質や心理学的傾向等々、つまり事象のカテゴリーによって法則包括的に説明しようとするだろう。しかし、この種の説明が不可能ではないとしても、歴史研究においては的はずれであるということを、私は主張したいのである。Hの歴史記述についてもう少し続けてみよう。仮りに、Hと方法論的に全く同意している他の研究者Oが、今度はH自身の行動をとりあげるとすればどういうことになるだろうか。OはHの（国王の行動を説明するという）行動を、彼のさまざまな環境的要因から、H自身には帰属しない事象のカテゴリーによって説明するにちがいない。ここでHによってもOによっても無視されていることは、国王やHの行為が「何ごとかを達成しようとしている行為」であるということである。言い換えると、例えばOは、Hの主張――国王の行為を事象のカテゴリーで説明すべきだとか、国王はしかじかの原因で隣国に宣戦布告をしたとか――を何か意味のある主張として見てはいないということにほかならない。というのは、Hは一定の理由から、事象のカテゴリーで説明すべきだとか、国王の行動はしかじかのことが原因となっているなどと主張しているのだが、Hと見解を同じくするOは、正にその見解の故に、Hの主張（これはHに帰属する概念、行為のカテゴリーで表現される）を額面通りに受けとってはならないのであって、新たにHの知らない概念で説明しなければならないからである。このようにして得られる記述から完全に脱落しているのは、研究対象となっている行為の意味である。Hが国王の行動について一定の説明仮説を述べているとき、彼は単にある言語的振舞いをしているのではなく、一つの主張をしている。したがって、彼は、その仮説的説明が十分合理的であるとか、証拠不十分であるとか、論理的に矛盾しているとか等々の評価や批判を期待している。同様に、国王が隣国に宣戦布告をするとき、彼は何かを目差した、意味のある行為をしている。つまり、国王の行為は時機尚早だとか、隣国との戦争は不利益だとか、外交交渉をもっと巧みに行う

べきだったとかの批判が意味をもつような行為なのである。これらの批判が「批判」として成りたつのは、その対象となっている主張や行為が「意味のある（意味を主張している）主張や行為」である限りにおいてである。動物の行動や、自分自身でその意味を理解していない子供や人間（気ちがい）の行動に向かって「批判」をすることは的はずれであろう。批判は、それをする者とされる者とが共有している概念や言語によって成されるときにのみ、「批判」としての意味をもつのである。そして、歴史的研究、あるいは一般的に、人間科学とは、対象となる人間的行為を、批判することが意味をもちうるこの地平で、記述し、説明し、評価するような研究なのである。

我われがある与えられた主張や行為に向かって批判をするということは、それらの主張や行為を、言わば、我われと対等の立場に置いて、取り扱おうとすることに他ならない。Hが彼の仮説を述べるという行為を、OがHに帰属しない事象のカテゴリーで説明するならば、その場合、HはそのOの説明に対して何らあらがう術をもたない。OはHに超越して、Hの入り得ない世界で彼の行為について語っている。研究者としてのOはHを自分と同等の人格と見なしているのではなく、一個の自然として取り扱っているのであるから、ちょうど、動物の行動や自然現象に向かって、非難めいたり、責任を要求したり、批判や擁護することが全く無意味であるのと同じように、OがHの仮説（または仮説する行為）に向かって、その合理性や妥当性をあれこれ言うことは無意味なのである。（もしHが非論理的な仮説を述べていたとすれば、OはHのその非論理的行為を演繹法則的に説明しなければならない。しかし、Oの説明が正しいとすれば、Hは非論理的仮説を述べる以外に何をしえたというのだろうか。他にしようがないときに、非難されても、それこそしようがない。）これに対し、我われが互いに批判し合ったり、合意したりする文脈は、相互に共通の言語や概念、共通の規準――これらがいつも明らかになっているとは限らない――を前提にしている。つまり、対等の資格でわたり合っているのである。

このことから、私の議論が、歴史家Hの観点から、すなわち、歴史家の時代の立場から国王の行為を評価したり、裁断、

することを許しているのだととられるならば、それは誤解である。OとHが（同時代人が）わたり合う地平と、Hと国王が（現代と過去が）わたり合う地平とは決して同じものではない。むしろ、Hが国王とわたり合うためには、Hは国王のもっている概念や規準でそうしなければならないのである。というのは、単に、Hが過去の概念や規準をもつことはできるのに対し、その逆は論理的に不可能だからである。ウェーバーが社会科学者の価値判断を禁じたとき、彼は、異なる規準をもつ人々の間の批判や評価（これは無意味）と、同じ規準を共有する人々の間の批判や評価との区別をし損なっているように思われる。歴史家が自分の時代の規準によって、研究対象である人々の行為を評価したり、断罪することは、ウェーバーが正しく指摘しているように、誤りであろう。しかし、対象となる人々の行為を彼ら自身の社会の規準によって評価することができないとすれば、実際、歴史家はこれらの行為を、そもそも行為として同定することすらできなくなってしまうのである。

ところで、私の議論は恐らく、「追体験」、「再行為」、「理解」等、ディルタイや歴史主義者たちの概念を思い出させるにちがいない。事実、私はこれらの概念の新しい解釈を試みているのである。私のものと彼らのものとの異同について詳しく述べないが、もし彼らの「理解」や「追体験」の概念が、実証主義者の言うように、論理学的、認識論的なものではなく、単に心理学的なものであるとすれば、これは私のものについてはあてはまらないであろう。行為と事象のカテゴリーの区別は論理学的な、あるいはむしろ、意味論的な区別なのである。[13]

註

（1）Dray, W., "The Historical Explanations of Actions Reconsidered", in Hook, S.,(ed.), *Philosophy and History*, pp.105-135; Donagan, A., "The Popper-Hempel Theory Reconsidered," in Dray, W.(ed.), *Philosophical Analysis and History*, pp.127-159; Mink, L. O., "The Autonomy of Historical Understanding," in Dray,(ed.) *loc. cit.*, pp.160-192.

（2）帰納確率的推論によって得られた予測を基にして行動が決定されているからと言っても、そのような行動自身が帰納的に

説明されることにはならない。「法則にしたがって行動する」と「法則にしたがって説明する」という表現において用いられている、この「したがって」の意味は重要な違いを含んでいるように思う。この違いは、ちょうど「ルールにしたがう」ことと「自然法則（たとえば生理学的法則）にしたがう」こととの違いに比較できる。

（3） Hanson, N. R., "Retroductive Inference," in Baumrin, B. (ed.), *Philosophy of Science: the Delaware Seminar*, Vol. I (1963).

（4） Hempel, C. G., "Explanation and Prediction by Covering Laws," in Baumrin, *loc. cit.*, p. 111.

（5） 科学哲学者が、近年、科学史への関心を高めているのは、我われと一面相似た状況に立っているからではないだろうか。

（6） このような問題のたて方を「歴史的方法」と呼んで推薦しているのは、ポッパーその人である。私は、このことからも、彼をいわゆるヘンペリアンと称される人々から区別すべきであると思う。Cf. *The Logic of Scientific Discovery*, pp. 16-17.

（7） Collingwood, R. G., *The Idea of History*, p. 302.

（8） 人間と自然という二分法的発想は時代遅れかも知れない。ここでは詳しく述べないが、私の狙いは、存在者を二種類に分類することではなく、存在者を二様に描くこと、あるいは、存在者に対して二様の態度をとること、の可能性を指摘することにある。

（9） こう結論するには、もっと詳細な分析を必要とすることは私も承知している。

（10） Collingwood, *The Principle of Art*, p. 157.

（11） 「感情の本性を研究するためには感覚している人が実際に何をしているのかを確認する必要があるのに対し、思考の本性を研究するためには、思考している人が実際に何をしているのかということと、さらに、その人のしていることが成功なのか失敗なのかということと、この二つを確認しなければならない。したがって、感情の科学は『経験的』（つまり観察可能な『事実』やものを確認し分類することに集中する）でなければならないが、思考の科学は『規範的』または（私はこう呼びたいが）『規準的』（'criteriological'）でなければならない。つまりそれは思考の『事実』のみならず、思考が自らに課している『規準』にも関わらねばならない」（*loc. cit.*, p. 171）。ライルの「達成語」（Achievement words）と「仕事語」（Task words）の区別と比較せよ。Ryle, G., *The Concept of Mind*, pp. 149-153.

（12） オグデン、リチャーズ『意味の意味』邦訳五四―五八頁。

（13） 以上の議論では「歴史的理解」の分析にまで達したとは言い難いかもしれない。この意味では予備的であるが、しかし、その分析に立ち入るための必要な考察であると思う。